岡山県立大学保健福祉学部紀要　第24巻１号2017年　125 ～ 131頁　http://doi.org/10.15009/00002220

短期入院の乳幼児をもつ母親の付き添い中の体験

網野裕子 *　沖本克子 *

要旨　本研究は、短期入院の乳幼児をもつ母親の付き添い中の体験を明らかにすることを目的とした。対象は、気管支肺炎等の感染症で緊急入院した乳幼児に付添う母親７名とした。入院後３～４日目に半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。その結果、発症から高熱が続く患児を自宅で看病していた母親は、入院による安心感と治療効果への期待を抱いていた。その一方で、付添う母親の食事・排泄・清潔など日常生活のニーズが満たされないこと、家事と付き添いの両立、仕事と付き添いとの板挟みと経済的負担、家族の生活の変化に対する悩み等、様々なネガティブな体験をしていた。しかし、短期入院だから自分が頑張れば乗り切れると、ひとりで頑張っていた。以上より、乳幼児の短期入院に付添っている母親は、入院に対し安心感をもつ一方で様々なネガティブな体験をするが、短期入院だから自分が頑張れば乗り切れるとひとりで頑張っており、看護師はそういった母親の頑張りに寄り添っていくことが重要であると示唆された。

キーワード：乳幼児、短期入院、付き添い、母親、体験

Ⅰ．はじめに

子どもが入院することは、家族全体に大きな影響を及ぼす（二宮他：2009）。特に、付き添う母親にとっては、精神的、身体的、社会的、すべてにおいて大きな変化が伴う。短期入院の子どもは、急性疾患で緊急入院することが多く、家族は様々な不安を抱えている。また全快を待たず退院になることも多く、不安や困難を感じながら家庭で病児を世話することもある（筒井：1991）。そのため、短期入院であっても、看護師による、付き添う母親へのケアと子どもの健康維持に関する指導は必要であると考える。しかし、短期入院では退院が早いため、付き添う母親や指導にまで、看護師の目は行き届きにくい。

短期入院の子どもに付き添う母親に焦点を当てた研究では、看護に対する母親の満足度（菊池他：2001）、看護師の母親への関わり（石上他：2008）、母親の思い（黒川他：2007）等が明らかになっているが、これらの研究は、乳幼児をもつ母親に焦点をあてたものではない。乳幼児は、養育者おもに母親の世話を必要とし、分離不安が強い時期でもある。そのため、乳幼児に付き添う母親は、学童に付き添う母親とは体験が異なると考えられる。

そこで、本研究は、乳幼児の短期入院に付き添っている母親への支援の示唆を得るため、短期入院の乳幼児をもつ母親の付き添い中の体験を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．用語の操作上の定義

短期入院：２週間以内に退院が見込まれている、急性疾患での入院とする。

母親の付き添い中の体験：付き添うことによって、実際に見て聞いて感じることで生じた、心理的・身体的・社会的状態とする。

Ⅲ．研究方法

１．研究対象及び調査期間

地方都市Ａ市にあるＢ病院小児病棟で、入院後１日以上経過した乳幼児に付き添っている母親を対象とした。期間は2013年３月～５月であった。

２．データ収集方法

入院後１日以上経過した家族を対象とし、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。入院前から現在までの経過、入院が決定して頭に浮かんだこと、入院して困ったこと・良かったこと等を質

* 岡山県立大学保健福祉学部看護学科　〒719-1197　岡山県総社市窪木111

問内容とした。インタビュー内容は承諾を得て録音した。面接は、各病室で、母親だけでなく患児とコミュニケーションをとりながら行った。大部屋に入院中の患児に付き添っている母親もいたが、面接時は同室患児と家族がいない状況であった。

３．データ分析方法

録音した面接内容を逐語録化し、質的記述的研究方法を用いて、カテゴリー化し、分析を行った。研究結果の信頼性と妥当性を高めるため、分析過程においては共同研究者間で合議し、また小児看護・小児保健領域の専門家の助言を受けた。

４．倫理的配慮

研究協力施設の看護責任者、病棟医長、病棟看護師長に許可を得た後、対象者に、研究目的・方法、プライバシーの保護、得られた情報は本研究の目的以外では使用しないこと、参加・協力は自由意志であること、途中撤回の自由、研究終了後データは速やかに破棄すること、研究結果の公表について、口頭と書面で説明行い同意を得た。調査は、岡山県立大学倫理審査委員会での承認後に実施した（番号：285）。

Ⅳ．結果

研究参加への同意が得られた対象者は７名であった。対象者の年齢は20歳代～30歳代、インタビュー時点での、入院付き添い期間は３～４日であった。付き添っている患児の疾患は呼吸器感染症、胃腸感染症、水痘等で、年齢は１歳６か月～５歳であった。（表１参照）

分析の結果、乳幼児の短期入院に付き添う母親の体験については、【子どもの入院に対する不安と期待で、心が揺れ動く】【入院を先延ばしにした後悔と自責】【入院環境に対して抱く満足感と不満】【子どもを守れるのは自分だけ】【日常生活におけるニーズが満たされない】【時間の流れが日常と異なる】【母親が気づいたきょうだいの変化】【忙しい父親に対する複雑な思い】【付き添いと家事の両立】【仕事と付き添いの板挟み】【入院による経済的負担】【祖父母サポート】【付き添い交代がない】【自分が頑張れば乗り切れる】の14カテゴリーが抽出された。以下、代表的な生データを「　　」、サブカテゴリーを＜　　＞カテゴリーを【　　】で示す。また、これらの体験を図式化したものを図１に示す。

１．【子どもの入院に対する不安と期待で、心が揺れ動く】

母親は、子どもの入院が決定したとき、「*もう６日くらい40度近くずーっとあって…だから、入院って言われて、もうなんかほっとした。*」と、＜入院による安心感と治療効果への期待＞を抱いていた。それと同時に、「*入院初めてなんで。何をすればいいんだろうか、できれば入院しないでやりたいなって。*」と、＜入院という未知な生活への不安＞を抱いていた。

２．【入院を先延ばしにした後悔と自責】

入院して楽になったわが子を見て、「*入院…早くすれば、こんな弱ることなかったのかなーって*」と、＜入院を先延ばしにした後悔＞を感じていた。

３．【入院環境に対して抱く満足感と不満】

母親は、「*看護婦さんがすごいいろいろと声かけをしてくれるので…入院してよかったなって*」と、＜医療者のサポートに対する安心感＞を抱いていた。また、「*トイレは（部屋に）ついているからすごい助かりましたね*」と、＜入院設備への満足感＞

表１　対象者の概要

対象者	年齢	患児の疾患	患児の年齢	入院日数
A	20歳代	気管支肺炎	3歳	4日
B	30歳代	熱性痙攣	5歳	4日
C	30歳代	水痘	3歳	4日
D	30歳代	アデノウイルス感染症、気管支肺炎、ロタウイルス胃腸炎	1歳6か月	3日
E	20歳代	ロタウイルス胃腸炎	1歳6か月	3日
F	30歳代	気管支肺炎	3歳	3日
G	30歳代	急性細気管支炎	1歳6か月	4日

を感じていた。しかし、反対に、「*付き添い食は3食いっぺんに予約しないと…前日までに予約しないといけないっていうのがあって*」と、＜入院設備への不満＞もあった。

４．【子どもを守れるのは自分だけ】
「*(看護師は) 出てきてもいいですよと言ってくださってるけど、泣くんですよ。預けたら。だから、お願いしてない。*」「*娘が小さいんで、やっぱ、私…から離れると、やっぱ泣くんで*」と、＜起きている患児を残して部屋の外に出ることができない＞と感じていた。

５．【日常生活におけるニーズが満たされない】
「*ご飯は、娘の余ったやつを食べたりだとか、あと、カップラーメンを一応旦那に買ってきてもらって…それを食べたり。*」と、付き添う母は＜出来たての食事を食べられない＞し、＜患児の残した物を食べる＞こともあった。また、「*ちょっとご飯とかジュース飲みたいなって思っても、寝てないと出れないから…*」と、＜食べる欲求をすぐに満たすことは出来ない＞と感じていた。また、＜家族のサポートがあるとシャワーをあびることができる＞母親がいる反面、「*病棟にシャワーあるけど、シャワーしている間、誰が（子どもを）見るんだって話になるというか…。子どもが怖がるから、看護師さんとかじゃあダメなんです。*」と、＜患児をひとりにできないため、シャワーをあびることを諦める＞母親もいた。さらに、付き添い交代がない母親の中には「*旦那さんは、次の休みまで休めないから、誰も来てくれない。ママの服はぜんぜんないんだよね。*」と、＜母親自身の交換する服がない＞母親もいた。「*トイレに行くのとかも、寝てからじゃないといけんし*」と、＜排泄欲求をすぐに満たすことが出来ない＞と感じる母親もおり、日常生活のニーズはなかなか満たすことができていなかった。

６．【時間の流れが日常と異なる】
「*結構毎日、仕事で忙しいんで、ちょっとラクかな、みたいな。*」と、子どもの入院に付き添うことは、＜普段忙しい母親にとって息抜きの時間＞となっていた。その反面、「*大変です。早く帰りたいね。一応、一週間っていう期間…でも長い…すごく長い。*」と、＜はやく退院したい＞という思いも抱いていた。

７．【母親が気づいたきょうだいの変化】
患児のきょうだいは、「*いったん家に帰って、次の日の…教科書とか用意して、着替えもって、おばあちゃんのところや伯母のところへ行く。*」と、＜生活変化や養育者の交替＞を経験しており、「*お姉ちゃん、だいぶ我慢してると思います。*」と、母親は＜きょうだいに対する心配＞を抱いていた。

８．【忙しい父親に対する複雑な思い】
「*朝早くて夜遅い仕事をしているので、面会はないです。病院にいるから安心だっていうのはあるかもしれないけど…子どもはどうって聞いてもこない*」と、＜患児の病状を気にしない父親への不満＞を抱いている母親がいた。その反面、「*(きょうだいの) お迎えとか、その後の夜のご飯とかおうちのことっていうのとか、夫に無理を言ってお願いしているので、申し訳ないなって思う気持ちも…*」と、日常生活が変化した父親に対して、母親は＜父親への申し訳なさ＞を感じていた。

９．【付き添いと家事の両立】
母親の中には、「*交代してもらったのでおうちの、家事のことを全部済ましてきた*」と、＜付き添い交代は家事の時間＞である母親もいた。

10. 【仕事と付き添いの板挟み】
子どもの入院が決まったとき「*電話ですみませんって。まあ、なんとか休みをもらって。どうにもできないんで。*」と、仕事をしている母親は、＜職場に対する申し訳なさ＞を感じつつも、＜付き添いが必要なのでどうしようもない＞と感じていた。

11. 【入院による経済的負担】
「*母子家庭でアルバイトなので、今週1週間の給料どうしようって*」と、＜仕事ができないことによる減給への不安＞や、「*お父さんがご飯できないから、いつもなんか、外に食べに行ったりして、お金がかかる*」と、＜自宅と病院の両方の生活による金銭的負担＞を感じていた。

12. 【祖父母サポート】
「*お姉ちゃんが家に帰るときは、おばあちゃんが*

来てくれてる」という＜患児のきょうだいに対する祖父母のサポート＞、「*母が…毎日顔を出してくれるので。母のサポートがあるから助かってますね。*」という＜母親に対する祖父母のサポート＞がある母親もいた。

13.【付き添い交代がない】

「*（お父さんは）仕事も休めないし。（付き添い交代を頼めないのは、）これはもう核家族の宿命ですよね*」と、＜付き添い交替ができないのは仕方がない＞と考えている母親もいた。

14.【自分が頑張れば乗り切れる】

母親は、「*自分はいいけど、子どものことになるとね。本当に心配で。*」と、＜自分より病気のわが子を心配＞していた。また、「*まあもう、自分のことはしょうがないかなって思って。1週間だし。*」と、短期入院なので＜自分が頑張れば乗り切れる＞と感じていた。

Ⅴ．考察

以下、母親の体験を、１．子どもの入院と付き添い、２．付き添いと家族、３．付き添いと社会的役割、４．母親の頑張り、に分けて考察する。

１．子どもの入院と付き添い

発症から高熱が続く患児を自宅で看病していた母親は、入院治療を受けることによって子どもが楽になれると、入院による安心感と治療効果への期待を抱いていた。これは、「母親は、入院したことにより治療や処置ができ安堵を感じた」と報告した三枝らの研究（三枝他：2012）と同様の結果であった。近年、少子化が進んでおり、自分の子どもが生まれるまで、子どもの看病をするという経験をしたことがない母親が大多数であろう。また、核家族化によって、子どもの看病についてアドバイスしてくれる家族が身近にいる母親も少ないと考えられる。さらに、乳幼児は、自分の身体状況を言葉で伝えることはできない。そのため、自宅でわが子を看病している母親は、通院治療で改善しない子どもの病状と、自分ひとりで看病するという状況に対し、大きな緊張と不安を抱いていると考えられる。そのような状況で、入院を勧められた母親がほっとするという体験をしたのは当然であろう。しかし同時に、入院という未知な生活への不安を抱いており、なるべく入院したくないと入院を先延ばしにした母親は、入院して楽になったわが子を見て後悔を感じていた。松島らは、87.5％の母親が初めての入院で不安があったと報告している（松島他：2014）。外来や救急外来での限られた時間で、看護師が入院に対する母親の不安を傾聴し対処しようとするのは困難である。しかし、入院を迷っている母親に対しては、入院に対する見通しがもてるような関わりをすることが必要ではないだろうか。

入院後、母親が体験したことは、不安で患児から離れることが出来ず、日常生活のニーズが満たされないことであった。これは、３歳未満児に付き添う母親を調査対象とした金山らの研究結果と同様であった（金山：2012）。母親は、看護師からサポートの申し出があっても、不安で患児から離れられない。母親のその気持ちに寄り添いつつ、母親と相談しながら、どのようにすれば少しでも母親の日常生活ニーズを満たすことができるかを考えていくことも、看護師にとって必要なケアであると考える。

２．付き添いと家族

母親が入院の付き添いをすることにより、家族も日常生活に変化があらわれる。乳幼児期の患児のきょうだいは幼児期から学童期の子どもが多く、保護者の養育が必要な時期である。主に養育を行っている母親が患児に付き添う場合、きょうだいは祖父母等の親戚へ預けられることが多い。親戚に頼れない場合は、父親がきょうだいの世話を行うこととなる。生活する場所や養育者の変化、育児時間の変化など、日常生活に大きな変化がある父親やきょうだいに対して、母親は心配と申し訳ないという気持ちを抱いていた。反対に、入院しても自分の日課を変えない父親に対しては、不満を抱いていた。家族の問題に、看護師が関われることは少ない。しかし、心配や不満といった母親の気持ちは、患児に伝わり、患児の回復過程にマイナスの影響を及ぼす。そのため、母親がモヤモヤとした気持ちを溜め込まないように、しっかりと母親の話を聞くことが、看護師に求められているのではないだろうか。

祖父母のサポートは、多くはきょうだいに向けられていたが、それによって母親は安心感を抱いていた。また、母親自身に対するサポートを、父親や祖父母から受けている母親もいた。その反面、父親や

祖父母との付き添いは、気分転換や休むための交替ではなく、家で家事を行うための時間となっている母親もいた。さらに、全く付き添いの交替がない母親もいた。このように付き添う母親を取り巻く家族の状況は多様であり、「父親や祖父母のサポートがあるので母親は休めている」とは一概に言えない。看護師は、付き添い交替の有無だけでなく、母親が交替時に何をしているのか、疲労が溜まっていないかも、観察していく必要があると考える。

3．付き添いと社会的役割

児童のいる世帯における母の仕事の有無をみると、「仕事あり」は67.2％となっており（厚生労働省、2017)、専業主婦より仕事をしている母親の割合が多くなっている。また、平成23年の社会生活基本調査（総務省、2012）によれば、家事関連時間（育児も含む）は、男性が42 分、女性が3時間35分と男女の間に依然として大きな差が見られている。したがって、仕事と家事・育児の両立で、普段忙しく動いている母親にとって、付き添っている間は仕事と家事から解放され、息抜きの時間となっていたと考えられる。また、インタビューは入院後3～4日という患児の状態が改善してきた頃に行ったため、そのような思いに至ったとも考えられる。しかし、職場には、急に1週間程度も休むことになった申し訳なさを感じており、「はやく退院したい」という思いも抱いていた。また、母子家庭でアルバイトをしている場合、働かなければ、その分給料がない。さらに、入院中は、普段の生活費以外に、外食やお弁当代など、臨時出費が重なる。そのため、母親は金銭的負担を感じており、そこからも「はやく退院したい」という思いに繋がっていた。

4．母親の頑張り

母親は、付添う母親の食事・排泄・清潔など日常生活のニーズが満たされないこと、家事と付き添いの両立、仕事と付き添いとの板挟み、入院による経済的負担、家族の生活の変化に対する悩み等、様々な問題を体験していた。しかし、母親自身のことは二の次で、子どもにとって何が一番良いかを中心に考えており、「短期入院だから自分が頑張れば乗り切れる」と、ひとりで頑張っていた。看護師の支援として、母親の思いを聞き、日常生活のニーズを満たすようにすることも大切であるが、まずは「ひとりで頑張っている母親」に声をかけ、母親の頑張りに寄り添っていくことが大事であると考える。そのうえで、母親の頑張りすぎが疲労につながり、疲労から母親自身の健康が維持できなくなること、母親自身の健康が維持されなければ、子どもの世話はできないことを伝えていくことが必要である。

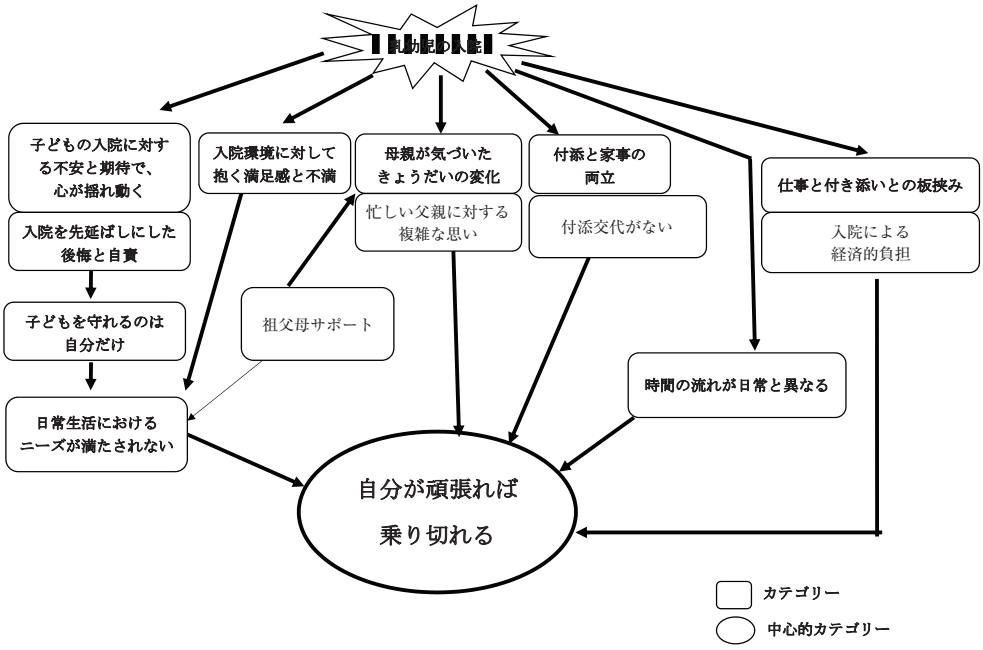

図1　乳幼児の短期入院に付き添っている母親の体験

Ⅵ．研究の限界

本研究は、１施設を対象としたものであり、対象者数が少ないことから、研究結果は一般化できない。今後、対象施設及び対象者数を増やし、調査することが必要である。

Ⅶ．結論

乳幼児の短期入院に付添っている母親の体験は、入院に対し安心感をもつ一方で、付添う母親の食事・排泄・清潔など日常生活のニーズが満たされないこと、家事と付き添いの両立、仕事と付き添いとの板挟みと経済的負担、家族の生活の変化に対する悩み等、多くの問題をもつが、短期入院だから自分が頑張れば乗り切れると、ひとりで頑張っているというものであった。

付記

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただきました施設およびご家族の皆様に深謝申し上げます。

引用文献

石上千晴、寺川真紀子、岩崎瞳（2008）：乳幼児の短期入院における看護師の母親への関わり．第39回日本看護学会論文集（小児看護）、104-106.

菊池圭子、山崎明美、熊谷恭子、及川幸代（2001）：短期入院児の看護に対する満足度と期待 ―母親と看護婦双方のアンケート調査から―．第32回日本看護学会論文集（小児看護）、31-32.

黒川恵子、井上麻衣、長山千紗、伊賀原由香（2007）：短期入院のこどもに付添う母親の思いについて．第38回日本看護学会論文集（小児看護）、32-34.18（1）、31-38.

厚生労働省（2017）：平成28年国民生活基礎調査の概況、http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/02.pdf 2017年8月25日15：50アクセス

松島由子、津曲良、山田知巳、安田明美、植田純子（2014）：初めて突然の緊急入院をした乳幼児期の子どもに付き添う母親の思いの調査、奈良県立三室病院看護学雑誌（30）、24-29.

二宮啓子、今野美紀編（2009）：小児看護学概論 子どもと家族に寄り添う援助、南江堂、東京、224.

三枝幸子、細川美香、中澤美樹、舟越和代、三浦浩美（2012）：初めて緊急入院した子どもに付き添う母親の思い、日本看護研究学会雑誌35（１）、107-116.

総務省（2012）：平成23年社会生活基本調査 http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf　2017年8月25日　16：00アクセス

筒井真優美（1991）：子供が病気になった時の母親の心配と関連要因に関する研究、第22回日本看護学会集録（小児看護）、35-37.

Experiences of mothers of infants who stay with their children when hospitalized for a short period of time to take care of them

YUKO AMINO*, KATSUKO OKIMOTO*

*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja, Okayama 719-1197, Japan.